

移植医療への感謝を込めて

私は、献腎移植を受けて27年のベテラン？移植者です。
私の移植体験を振り返ることで、どなたかの参考になれば幸いです。
もし移植をしなかった場合、色々な場面で制限され身体的にも精神的にもストレスがたまる人生になっていたことでしょう。

移植を受ける以前の状況は 40 代後半に会社の健康診断で尿蛋白＋と診断され、まず慢性腎不全の通院治療を受けることから始まりました。
やがて 50 代半ばになり、ついに避けたかった透析治療が必要になり暗澹たる気持ちになったことを鮮明に覚えています。
丁度、家では2人の息子が未だ学生で教育費がかさむ頃でした。
透析治療は会社帰りの週3回、4時間／1回で受けていましたが仕事の出張は1泊に限られ、長期出張は出来なくなりました。
この煩わしい透析治療から逃れるには、腎臓移植しかないということで、すぐさま移植を希望し待機者に登録しました。

透析導入から5年が経過した頃、一度目の献腎移植確認の連絡が有りましたが突然な話で動転し(移植手術の恐怖も有り)思わず知らず断ってしまいました。
あとから、千載一遇のチャンスを自ら断ってしまったことをどんなに後悔したことか分かりません。移植待機者3万人と言われた頃で2度はないものと諦めていた時、一年も経たない間に奇跡が起き、2回目の移植確認が有りました。
今度は勿論、二つ返事で承諾し病院へ直行したのは言うまでも有りません。
今のように全国的移植ネットワークがなかった27年前は、愛知方式と言われた腎移植が盛んな時代でしたので運も良かったのでしょう。

お陰さまで会社でも(現在はリタイヤ)家庭でも健常者と変わらない(QOL)生活が可能になりました。

そして、好きな温泉旅行や海外旅行へ夫婦で出かけ移植生活を享受しております。
また、秋の移植者スポーツ大会・懇親会には毎年欠かさずに参加しております。

私は起床すると、床の中でまず下腹(移植腎臓)に手を当て巡り合わせて戴いたドナーさんや移植医療に携わる方々に感謝するのを日課にしております。

現在も国内では、この素晴らしい移植医療は待機者の限られた方にしか提供されていないのが現状です。

移植体験者として、感謝の気持ちを込めて移植医療がせめて欧米並みの水準になることを願って微力ながら普及活動に務めたいと思っております。

以上
ペンネーム: 青空太郎